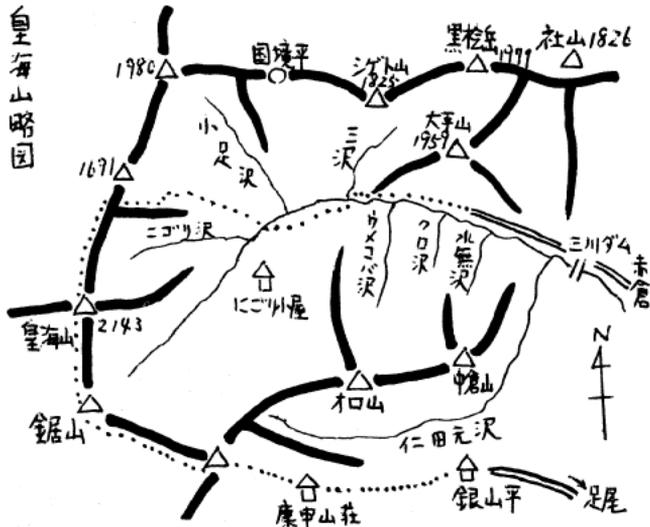




大利根の支流渡良瀬川が、私達の幼き頃の小魚釣りし思い出の川である。時がたちいつの日からか同じ川に関わる遊びは変わり、熱心に源流の山を訪ねる様になっており、その要に皇海山がある。地図上の位置は近年氷壁登攀の進歩隆盛と共に、その格好のゲレンデを提供してくれるので多くの人を迎えている。足尾松木谷の最奥と紹介すればすぐお解り載けると思いますが。

三方を山に囲まれている本県は山あれば川あり、川あれば道ありとほとんど本県からの入山路を持つているが、渡良瀬川だけ越境し隣の栃木県に上流部が属してしま、今回の皇海山は栃木県側か



—かくされた山⑦—

# 皇海山

大間々山岳会

らの登路の紹介になってしまおうをま、おこわりしておきます。

日本に近代登山が移入されアルプス登頂時代が終りを告げる大正八年、郷土の生んだ日本岳界の先覚者、太田市寺井出身の木暮理太郎氏が藤島敏夫氏と十一月、秋も深まりきった頃に登頂したのがこの山の近代登山の幕開けと云われている。その後は地元足尾山岳会他の努力により縦走路が切り開かれたが、今でも寂境と呼ぶに相応しい静かな山行のできる地域になっている。入山は、国鉄足尾線で終点間藤駅、国道122号で足尾より赤倉と辿り三川(久蔵沢・松木沢・仁田元沢)のダムより始まる。且つては荒涼とした岩の廃墟だった本谷も今では、治山治水工事用道路がウメコバ沢出合近く迄届いており世俗的になってしまったが、両岸の支流は変わっていないので興味を持って辿る事ができる。ウメコバ沢の出合より両岸は屏風になり左岸に魅力的な出合をもち、且つ内容のある三沢と小足沢をすぎると、本谷の奥に初めて皇海山がその雄姿を見せる。適当に本谷を辿ると左手の大岩に「こり小屋入口」とポイントが見える。(小屋はかつて古河鉱業の採鉱用で今は無人避難小屋として開放されている。)ここをすぎると、左岸に合流するこり沢の手前にあるのがもみじ尾根で、こりより標識頼りに本谷と別れる。樺の木立の中を少しの間辿ると尾根の背に出て左手に皇海山が見えてく

る。一度右へ尾根は曲り国境平と



小足沢出合附近よりの皇海山

呼ばれる落葉松の下に笹の生えた静かな原に着く。こりが県界尾根で北右へ錫岳から日光白根山へ、南左へ皇海山から本欄で先

紹介された架装丸山へと連なっている一角である。山頂へは左折する事になり尾根の左側を巻く様に、程なく急登となり石楠花の密生する尾根筋にでる。(この地点は、逆にみると猛烈なフッシュの群馬側へ入ってしまうので注意)

又、冬期については、平均的積雪は皇海山頂で1m程度であり、四季を通じて静かなたたずまいを見せているのが渡良瀬源流の盟主皇海山です。この姿をいつ迄も保ち愛していきたくと思っています。

## 「会略歴」

昭和26年、スポーツ振興モデル市町村指定で、大間々町体育協会山岳部として発足、町民の体育振興を目的としてキャンプ講習会、町民ハイキング等の活動を継続中。登山活動は地元山を主体に当初の活動をしていたが、現在では地域を県外にまで拡大、縦走、岩登り、スキーツアーと申広くなっている。現役員員数 十八名  
事務所 山田郡大間々町3丁目1341番地 山口慶一 方  
02777(2)1002  
会長 山口慶一 (文責 藤沼隆男)

く事ができる。この場合渡良瀬源流縦走の半分をすませた事にるので、この山城の本当の味を知る為に完全縦走を是非勧めます。(三川ダム→社山→大平山→黒檜山→シゲト山→三俣山→皇海山→鏡山→庚申山→オロ山→沢入山→中倉山→三川ダム。残雪期で2泊3日)

赤倉→4時間→こり小屋→30分→もみじ尾根取付→1時間→国境平→2時間→皇海山→1時間→鏡山→2時間→庚申山→30分→庚申山→2時間→銀山平

久呂保の嶺呂は現在の赤城山のことで、クロホのクロは山頂付近の黒々とした針葉樹林が遠望されることから、ホは高くそびえたつ様子を言う言葉です。伊香保の嶺呂のイカホは、いかつい高い山、即ち国の中央に大きな山々そびえたつている様子を表わしています。いずれも麗の人々が親愛をこめて呼んでいたようです。

山の好きな男のセトモノ店

# 石井

県庁通り 前橋ビル ☎0272-21-1678代  
卸部 前橋市間屋町 ☎0272-51-1000代

エスパーステント多量入荷

# 山とスキーの店 石井

伊勢崎市中央町18番8号  
TEL 0270-25-0272

岳連会員特別価格にて奉仕させていただきます



③

### 女子雪水クラブ 安中 秀子

深い沢を前面に見せて登り立つ  
タムセルク。その隣に位置する双  
耳峰のカンテガ。大空につきぬけ  
るような黒いトンがった山、ク  
ン・ピラ。そして優美な容姿のア  
マ・グララム。視点をずらすだけ  
で、次から次に網膜に写るとつ  
もなく大きな山。あまりにも近く、  
あまりにも数多い山々に圧倒され  
っぱなしで過ぎていく毎日であつ  
た。

本日の宿はデンボジェにあるシ  
エルバの妻の家。庭先には神奈川  
ロッツ隊のカーボン・ボックス  
が幾つも転がっていた。昨日に加  
えて、タウツエ・ロッツエ、など  
が記憶の列に加わつてきた。

六日、高度順化の爲の停滞日。  
シエルバが母親の家に連れてつて  
くれた。そこには畜舎とたいして  
連わらない中で生活があつた。不  
深とか貧困とか、安易に使つてい  
い言葉ではないが、極めて基本的  
なものが足りない。例えば、  
温度とか、きれいな水、そしてそ  
こから派生する数々のものが欠如  
していることに感じた。それでも  
大らかに生きている底知れぬ力、  
せひとも影響を受けてみたい。

七日、子供の前でもいかに離れ  
ていくと切に感じた。それでも  
大らかに生きている底知れぬ力、  
せひとも影響を受けてみたい。

五日、イムジャ・コーラ沿いの  
道を緩い傾斜で登る。前後して歩  
いていた日本人のおじさんが、「う  
らやましいことだ」と休みながら  
五、イムジャ・コーラ沿いの  
道を緩い傾斜で登る。前後して歩  
いていた日本人のおじさんが、「う  
らやましいことだ」と休みながら



mt. ギャチュン・カン 7,922 m (於 ゴーキョ西峰)

難そうにしているシエルバを尻目  
に歩きます。ペリジェを眼下に見  
やりながら、伸びやかな台地を進  
む。足元には生えながらドライ・  
フラワーになった、エーデルワイ  
スが散在し、左手には傾斜したタ  
ウツエがせりあがっていた。トク  
ラを過ぎたあたりからクーンパ氷  
河が始まった。

前後して歩いている多くの人達  
とも顔なじみになり、ことにシエ  
ルバが顔が似ているせいか気安く  
話しかけてくる。「タバイン・ラ  
ムロ」とか、「スタダレ・ゲツテ  
イ」とか、きよんとしている私  
達をからかつては楽しんでいる  
らなみに訳すと、「あなたはずて  
きだ」というのだそうである。ほ  
んどかしら?

八日、ゴラジェから二時間半の  
道のり、ロラシエツプという  
カルカ(モンスーン村)に着いた。  
カメラだけを持つてすぐカラ・  
パタルへ向う。空身に近い状態  
なのに疲れが早い。しばらく亀甲  
土の道を歩いた後、岩の山肌にな  
った。プロモリの支稜線上のコブ、  
カラ・パタル(五五四五m)。

頭上へのしかかるプロモリの量感、  
対面に見えるヌパツエの優雅さ、  
こんなに高いのに、ここはまだヒ  
マヤの軒先のようなだ。  
エベレストは遠く、黒い固まり  
の三角錐であった。心が揺れるよ  
うな感激はなかったが、あれが世  
界で一番高い山なのかと思えば、  
改めて見直したりもした。

九日、昨夜、気にしていた脈は  
数も下つて、今日はエベレスト  
B・Cに向けて出発した。歩いて  
もく水の上、ブルー・アイスの  
水山がシヤンテリアのような融け  
方をしていた。

クーンパ氷河のいきどまり、あ  
の有名なエベレスト・アイス・フ  
ォールが正面になり、ほんの数m  
先から始まって、空のむこうへ消  
えていた。B・Cを縦横にラマ教  
の旗がはためいて、地には幾はり  
も悪習の跡が残っていた。  
たった一つ気になったのは、日  
本語の書かれているゴミが、あま  
りにも多かつたこと。同じ国の人  
間として、おもはゆきを感じない  
わけにはいかなかった。

十一日、振り返をくりかえしな  
がら、昨日ペリジェに着いた。  
今日はパンボジェでイエテイ・  
ヘッドなるのを見た。頭はヤシ  
の実の表皮みたいな代物。手の骨  
はゼラチンの固まりみたいだ。  
この寺の辺から山腹をまいて、  
ボルツエに向つた。所々ヤクが遊  
んでいるのを見て、管理がどうな  
っているのか等、いらぬ心配ばか  
りしていた。村は広い台地であつ  
た。学校もあるらしく、泊めてく  
れた家の子が教科書を持ってきて  
見せてくれた。

十二日、ドウド・コシの左岸に  
ついた道をゴキョへと進む。対  
岸に同じような道を見ながら、人  
のいない村を幾つも通り過ぎた。  
十三日、ターレをでてまもなく、  
谷はVからU字状に窄つてきた。  
ゴジュンパ氷河の末端を登りき  
ると、そこは小さな湖と平らな台  
地、湖岸にせりあがる険とした

山が連なっていた。ゴキョは下  
から三つ目の湖岸にあるカルカだ  
った。村には老女が一人いて、ヤ  
クの糞を集めたりしていた。

十四日、エメラルド・グリーン  
の湖水を貯えた、ドウド・ボカリ  
の脇にボタ山があつた。登るにつ  
れ、たくさんの山々が現われる。  
中でもチョー・オユ、ギャチュ  
ン・カン、タウツエが目立つ存在  
だ。いかにボタ山の風采でも優に  
五〇〇〇mは越えている。やはり、  
一步の疲れが早い。

群馬でみんなが夢膨らませてい  
るギャチュン・カンは、まるで五  
月人形のカプトのようであつた。

山が連なっていた。ゴキョは下  
から三つ目の湖岸にあるカルカだ  
った。村には老女が一人いて、ヤ  
クの糞を集めたりしていた。

十四日、エメラルド・グリーン  
の湖水を貯えた、ドウド・ボカリ  
の脇にボタ山があつた。登るにつ  
れ、たくさんの山々が現われる。  
中でもチョー・オユ、ギャチュ  
ン・カン、タウツエが目立つ存在  
だ。いかにボタ山の風采でも優に  
五〇〇〇mは越えている。やはり、  
一步の疲れが早い。

群馬でみんなが夢膨らませてい  
るギャチュン・カンは、まるで五  
月人形のカプトのようであつた。

今日は登山道にすぎないこの道  
は、昔から関東と越後を結ぶ要路  
として三國街道の次に重要な役割  
をはたしていた。この清水越えの  
最も古い記録としては、天文二十  
年(一五五一年)に時の関東管領  
であつた上杉憲政が北条氏に追わ  
れて、長尾景虎(のちの上杉謙信)  
を頼つて越後に逃げたのもここを  
通つてであつた。その後上杉謙信  
は関東に兵を十数回出している  
が、最初の頃はこの街道の時を越  
えて関東に入ったようである。清  
水峠から清水部落に下る尾根に謙  
信尾根と呼ぶ尾根がある。こんな  
ことから峠では、物資運送のため  
古くから利用されてきたのであ  
る。越後からは、米、酒が運ばれ  
たが上州側からは特にはなく、越  
後から来た人々が、うどんやそば  
を買つて持ち帰つた。中には、毒  
消し売りや、ゴゼと呼ばれた遊芸  
人も来たらしい。ゴゼは若い娘で  
短いイトリという腰巻き、紺の  
脚絆、わらじ、足袋の底のない甲  
かけという支度で三味線、着替え  
を背負つて男に二三人が手を引  
かれて来た。三味線に合せて独  
特の節回しで物語を歌つた。水上  
付近には阿部という姓があるが、  
昔からこの地方の豪族であるう  
と思われ、清水部落と湯楯曾で、峠  
の北と南でこの街道の番所役をし  
ていた。ここで一体全体清水街道  
は、どこを通つていたのかという  
と、土合から来て、谷川山荘から  
湯楯曾川沿いに登る現在では新道  
と呼んでいる道である。ここから  
マチカ沢、一ノ倉沢を通り、だい  
この国道は谷川岳東面の中腹を横  
切つており、冬になると雪崩のた  
ちに破壊され、わずかに十年で通行  
不能となつてしまつた。このため  
三國街道が幹線道路となり、さら  
に明治十六年に信越線が開通す  
ると、清水街道は国道から格下げ  
となり、旧国道となつてしまつた。

### 清水越えの山道

この国道は谷川岳東面の中腹を横  
切つており、冬になると雪崩のた  
ちに破壊され、わずかに十年で通行  
不能となつてしまつた。このため  
三國街道が幹線道路となり、さら  
に明治十六年に信越線が開通す  
ると、清水街道は国道から格下げ  
となり、旧国道となつてしまつた。

婚礼引出物卸価格にて奉仕致します  
贈答品・記念品・引出物  
株式会社 丸興  
御一報下されば伺います  
高崎市上中居 1382  
TEL 0273-52-0970(代)

この国道は谷川岳東面の中腹を横  
切つており、冬になると雪崩のた  
ちに破壊され、わずかに十年で通行  
不能となつてしまつた。このため  
三國街道が幹線道路となり、さら  
に明治十六年に信越線が開通す  
ると、清水街道は国道から格下げ  
となり、旧国道となつてしまつた。

